令和5年度(2023年度) 学校評価総括表　　【伊丹市立花里小学校】

教育目標	強く やさしく たくましい 花里の子の育成 ～自分を愛し、自分に自信がもてる 人間性豊かでたくましい児童をめざして～
重点目標	①自己肯定感を高め、新たなことに挑戦する勇気を育む②「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善　③生きる力の育成　④地域とともにある学校づくり

主要施策	施策目標 基本施策		重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者の評価
学校教育	知・徳・体の調和のとれた児童・生徒の育成	「確かな学力」の育成 ①授業改善 ②誰一人取り残さない取組 ③学校・家庭・地域の連携	・基礎的、基本的な知識・技能を習得する。 ・家庭学習（自主学習を含む）を定着させる。 ・一人ひとりが主体的に学び表現力を高める。 豊かに表現できる思考力、判断力、表現力を育てる授業を展開する。 ・読書活動を充実させ、語彙力の獲得を図る。	・少人数指導やTTなど多様な授業形態を工夫し、基礎・基本の定着を図る。 ・朝学習の徹底と内容の充実を図る。 ・CRT調査等による実態把握と対策を行う。 ・子どもの実態に即した課題を出す。 ・3年生から自主学習に取り組ませる。 ・各学年に応じた「家庭学習の手引き」の配布と、自主学習の内容を紹介する等の工夫を行う。 ・家庭学習や生活に関する振り返りのアンケートをPTAと連携して行う。 ・自分の考えを持ち、それを表現する力を育成するため、各学年に合った表現する力を明確にする。 ・どの教科でも、意見交流の場を効果的に取り入れていく。 ・週１回の図書の時間や朝読書などを利用し、読書の時間を充実させ、語彙力や表現力を豊かにする。	・児童アンケートで「授業がわかりやすく、楽しい」と回答した割合が80%以上である。 ・毎日の宿題を全員が提出する。 ・学年×10分＋20分の宿題 （自主学習を含む）に取り組めるようにする。 ・ワークシートや振り返りで考えの深まりが見られる。 ・1週間の読書時間、合計70分以上を達成する。 （図書・朝読含む）	B	・児童アンケート結果が79.6%と、前回を2%上回り、目標の数値に近づいた。保護者アンケートでは、「学校の授業を通して、学力がついている」92.3%、「学校は、授業をわかりやすく工夫している」94%で前回を3.2%上回った回答であった。 ・今年度も、学団ごとで学力向上プランの見直しを図り、①個別指導の充実②朝学習の徹底③家庭学習の充実を三本柱に基礎基本の定着や学習規律の改善に取り組んだ。また、去年の児童の実態から学力向上に効果的な語彙力にも取り組んだ。 ・年度初めに全家庭に「家庭学習の手引き」を配布し、教科の指定や具体的な手順を提示することにより家庭学習の習慣づけを図った。また、自主学習の具体例を紹介し、子どもたちの取り組みのヒントとした。 ・「家庭学習の時間が60分以上」と回答した児童は23%であり、30分未満の児童が39%いることは課題である。 ・主体的に学ぶ児童の姿や、そのための研究方法について、全職員で共通理解し進むことができた。 ・児童の話し合い活動・交流の場をさらに積極的に取り入れ、自分自身や自分の考えを、主体的に発信できる児童を目指して、さらなる手立てを研究していく必要がある。 ・図書ボランティアによる毎月の読み聞かせを低学年だけでなく中・高学年でも行った。 ・学校司書と連携して行った読書まつりの開催など、本に触れる機会を多く設けた。しかし、1週間の読書時間が70分以上と回答した児童は27.9%、30分未満と回答した児童は45.4%であり、読書時間が少ないことが課題である。	・来年度も今年度同様に教科担任制など多様な授業形態を取り入れ、子どもたちに分かりやすい授業、基礎基本の定着が図られるように取り組んでいく。 ・他学年や専科の教員と連携し、教師同士がお互いを高め合う機会を増やすことで、授業づくりの工夫をしていく。 ・学力向上の三本柱を軸に、基礎基本の定着、学力の底上げを図っていく。基礎基本の定着を図るためCRT調査を行った。毎年CRT調査を行い、個々の学力を詳しく把握していく予定である。 ・来年度も、引き続き「家庭学習の手引き」を配布し、家庭への啓発を進め、学習習慣づくりに取り組んでいく。また、「学力向上プラン」をもとに、支援が必要な児童に対しては、個別に具体的な指導をしていく。 ・自主学習を定着させていくために、保護者向けに自主学習の具体的内容を学年便りに載せることや、図書館に自主学習のコーナーを設置し、進んで自主学習に取り組む環境作りをしていく。 ・話す・聞く力を系統的に高められるように、計画を立てる。 ・学習の見通しを児童と共有し、主体的に学べるような授業作りを行う。 ・自分の考えを表明する場、交流の場を取り入れ、表現することにも重点的に取り組んでいく。 ・読書の楽しさを見つけられるイベントの開催。 ・図書ボランティアや学校司書と連携して、読書意欲を高められるように取り組んでいく。 ・家庭と連携して学校全体で読書時間の確保に努める。 ・以下具体案（全クラス共通で取り組む） ①読書10分を週末の宿題で出す。 ②朝学で読書の曜日をつくる。	・教育活動全般にわたって児童の興味を引き出す工夫がなされている。 ・子どもたちと「学習のみとおし」を共有し、自ら考え主体的に行動できる子どもに育つよう取り組んでいただきたい。 ・取組によって、学力テストの結果も全国平均並みになった。 ・児童アンケート、保護者アンケート共に前回を上回る結果があり、改善の効果が見られる。今後も継続を。 ・朝読は、中学校でも実施しており、小中連携の面からも読書習慣の定着を図っていただきたい。 ・読書時間が増えるよう工夫が必要 ・読書時間減少の原因を子どもたちと考えてみてはどうか。 ・校内は、整理整頓されており、教室の掲示物も工夫され、学習環境は整っている。参観で見る児童の姿にも学習に対する意欲を感じる。 ・支援が必要な児童に対しても個別ケアをよろしくお願いしたい。 ・学習習慣の定着に関して、環境づくりと規則正しい生活リズムが必要。登校支援に関しては、地域の学生ボランティアの活用を検討されたい。
		新しい時代に対応した教育の推進 ①情報活用能力の育成 ②英語教育の充実 ③デジタル化の促進	・授業の展開を工夫し、学習意欲を向上させる。 ・児童の情報活用能力の育成を図る。	・各教科に合わせてiPadやモニター等のICT機器を有効活用する。 ・タブレットの操作などにおいて、情報活用能力を高める。 ・情報モラル教育の年間カリキュラムを組み、各学年月2～3回程度授業を実施する。	・月10時間以上活用することを目標とし、効果的な活用方法の研修や情報交流を行う。 ・児童アンケートで「タブレットやテレビモニターを使った授業はわかりやすい」と回答した割合が90%以上になる。また、教職員アンケートで「ICT機器（タブレット、モニターなど）を活用した教育活動を行っている」と回答した割合が90%以上になる。	B	・児童アンケートで「タブレットやテレビモニターを使った授業はわかりやすい」と回答した割合は、87%と90%を下回る結果となった。 ・教職員アンケートでは「ICT機器（タブレット、モニターなど）を活用した教育活動を行っている」と回答した割合も87%と、90%を下回る結果となった。 ・アンケート結果から、教員がICT活用する場面に差があることが課題である。	・教員同士の授業中のICT活用場面について気軽に共有できる時間の確保に努めていく。（自主研修のHOPなどを活用する。） ・夏期研修で情報活用について行う。	・一人一台のタブレット端末が、授業の中で有効活用されている。 ・情報モラル教育にも力を入れていただきたい。 ・タブレット端末の学習効果を感じる。
		「豊かな心」の育成 ①道徳教育の推進 ②いじめ等の未然防止、早期発見、早期対応に向けての組織的な取組の推進 ③不登校の児童生徒やその保護者への支援体制の充実 ④体験活動等の実施	・自尊感情、自己肯定感を育成する。 ・学級作りを工夫する。 （支持的風土作り） ・いじめの未然防止、早期発見、早期対応に取り組む。 ・不登校の予防と解消を図る。	・子どものがんばりを学校と家庭で連携して認めていく。 ・学級の中で自分の意見が安心して言い合えるような雰囲気作り（クラス作り）を進めていく。 ・いじめ等に関する実態把握のためのアンケート調査を実施し実態把握を行い、はやい対応を行う。 ・積極的に家庭へ連絡をとり、連携を図る。	・児童アンケートで「自分にはいいところがある」と言える子を75%以上に増やす。 ・児童アンケートで「自分を大切にすることや他の人への思いやりについて教えてもらっている」と回答 した割合が80%以上である。 ・児童アンケートで「学校に来るのが楽しい。」と回答した割合が90%以上である。 ・登校への行き渋りが見られる児童に対して、職員研修や不登校対策委員会を開くなど全職員で取り組み、不登校児童数を減らす。	B	・児童アンケートで「自分にはいいところがある」と回答した割合は65%だった。自分に自信が持てない児童が多くいることがわかる。 ・児童アンケートで「自分を大切にすることや他の人への思いやりについて教えてもらっている」と回答 した割合が85%を超え、目標達成した。 ・児童アンケートで「学校に来るのが楽しい。」と回答した割合が82%だった。しかし行事などで力が発揮できると回答した児童は89%を超えていた。 ・不登校についての職員研修は不十分だった。不登校対策委員会は開催し、組織的な対応に努めた。	・行事ごとで力を発揮できる児童が多く、自己有用感を感じたり学校へ来る意欲が行事によって高められたりする傾向が見られた。そのことを手がかりに、日常の中でも役割意識を持たせて、より自己有用感、自己肯定感を高める活動を学校生活の中に取り入れていく。 ・不登校支援員をはじめとして、職員一丸となって不登校対策を行ってきたが、まだまだ不十分な点もある。専門性を高められるような研修会の開催や、対策会議を引き続き行っていく。	・支援員の活用に加えて、規則正しい生活が重要。誰もが明るく元気に学校に通いたいと思っていることを信じて取組を続けていただきたい。 ・登校支援によって児童も保護者も登校することへの意識が高まっている。 ・朝の登校時刻に間に合わない児童がかなりの数いるのが残念 ・自尊心の向上を目指す教育が必要。「学校が楽しい」と言える子が多いと嬉しい。 ・コロナ禍では、行事への影響を大きく感じた。難しい課題であるが、今後も力を入れてほしい。
		「健やかな体」の育成 ①児童生徒の体力向上の促進 ②魅力ある部活動の推進 ③発達段階に応じた健全な食育の推進	・自ら進んで体力を向上させようとする児童を育てる。	・花里元気アップ運動を推進する。 ・睡眠、栄養、運動、休養などのバランスのとれた健康的な生活習慣を身につけさせる。 ・「早寝・早起き・朝ごはん」を推進する。 ・食に対する指導を充実する。 ・感染症感染防止対策の徹底。	・週1回クラス全員で運動場に出て、体を動かす。 ・夜は10時までに寝て、朝は7時までに起きている児童が75%いる。 ・朝ごはんを食べてくる児童が90%以上いる。	B	・花里元気アップ運動や花リンピックなどのイベント時には運動場に出て体を動かしている。しかしイベント時以外で自主的にかつ持続的に外遊びをする習慣がついていない児童がいる。 ・食に関する指導や、保健だよりなどで健康な生活に関して呼びかけを行っているが、「早寝・早起きを心がけている」が74%、「朝ご飯を毎日食べている」88.9%と目標を若干下回った。	・花リンピックの内容を精選し、実施期間を長期的なものにし、持続的な運動習慣へとつなげる。 ・健康な生活を送ることの大切さについて、児童だけでなく保護者にもクラスルームなどを使って呼びかけを行い、家庭と連携して取り組むことで、健康な生活に関する指導の充実を図っていく。 ・健康な生活に関する手紙などの配布の際や風邪などの流行の季節の際には、教師が一声かけ、児童に意識づけしていく。	・運動や生活の習慣を身につけるよう指導の継続を望む。 ・朝ご飯を食べる児童が増えていて良し ・イベントごとへの発的な参加を ・早寝・早億・朝ご飯＋家庭教育」の定着を図ることが必要。 ・放課後の運動場開放は、保護者の安心感も得られ良い。行き帰りの自転車の乗り方には、安全面から指導が必要。
		教育相談・支援体制の充実 ①キャリア教育の推進 ②スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーの活用 ③教育相談の充実	・自ら課題を見つけ、考え・行動できる児童を育てる。 ・目標に向かって努力し、意欲的に学び続ける態度を育成する。	・「キャリア・パスポート」を活用し、4月に1年の目標設定を記入させる。 ・半年ごとに児童が自己の活動を振り返り、新たな目標や課題を持たせる。 ・子どもの成長を見取り、次の一歩を出せるようなコメントを教師や保護者が記入する。	・児童アンケートで「自分は、将来の夢や職業について考えている」と回答した割合が80%以上である。また、教職員アンケートで「児童に夢をもつこと、仕事や働くことの大切さを教えている」と回答した割合が80%以上である。	B	・児童アンケートの結果75.3%、教職員アンケートの結果は83.3%が肯定的回答だった。 ・キャリアパスポートに記入することで、これまでの自分とこれからの自分を意識し、自分を見つめ直すことができていた。 ・スクールカウンセラーと連携を図り、不安のある児童の聞き取りを細やかに行うことができた。また、児童のストレスチェックをもとに夏休みに研修を行い、児童理解に努めた。 ・必要に応じて迅速に巡回相談を行うことができた。 ・学習支援員を活用することで、支援を必要とする児童をサポートできた。	・キャリア・パスポートへのコメントだけでなく、日頃から、自ら考え・行動できるように声かけや励ましを行う。 ・教科を超えて、働くことの意義や目標に向かって努力することの素晴らしさ・大切さを伝えていく。 ・学習支援員をさらに効果的に活用する。 ・スクールソーシャルワーカーとさらに連携を図る。	・キャリアパスポートが上級学校へ継続して活用できると、自分の成長に自己有用感もつために有効。 ・日頃から自ら考え、行動できるように声かけや子どもを育てるための励ましを行う事が大切である。 ・将来に夢をもっている児童が少ない。 ・スクールカウンセラーの活用は良い。 ・個々へのきめ細やかな対応をお願いしたい。
		特別支援教育の推進 ①伊丹特別支援学校の活性化 ②特別支援教育の充実	・児童の実態把握に基づき、個別の支援計画などを作成し、保護者・教職員と連携をして、適切な対応を行う。 ・それぞれの子どもの、校内支援体制を確立する。	・特別支援学級保護者に対して、年2回以上の参観・懇談の実施。 ・教職員に対して、年1回以上の特別支援学級参観（授業公開）の実施。 ・通常学級に在籍する配慮を要する児童の特性や支援について、校内委員会や校内研修（年2回）で交流し、関連機関との積極的な連携を図る。	・かがやき参観・懇談を年2回以上実施する。 ・全教員が特別支援学級児童を理解するための特別支援学級参観を年1回以上実施する。 ・コンサルテーションの実施等、関連機関と積極的に連携する。	B	・特別支援学級保護者に対して年2回以上の参観・懇談を実施し、教職員に対して特別支援学級参観を実施することができた。 ・通常学級に在籍する配慮を要する児童の特性や支援について、校内委員会や校内研修（年2回）で交流し、共有することができた。また日頃から、教師間で情報共有をすることで、それぞれに合った支援方法を考え、取り組むことができた。	・支援を必要とする児童に対する理解を深め、一人ひとりに合ったきめ細かい支援を継続していく。 ・必要に応じて、関連機関との連携を深め、より多くの児童理解を図り、支援を行う。 ・特別支援教育コーディネーターを中心に、効果的な個別支援の実施に取り組む。	・今後も継続した取組を願う。 ・支援を必要とする児童の理解を深め、支援を継続していくことが大切である。 ・支援を必要とする児童に継続して関わり、1年生からの成長を感じている。心も落ち着き、あいさつできる姿に成長を感じる。 ・個の指導と社会性の形成（SSTを含めて）は難しい課題である。みとおしをもって進めていただきたい。
		教職員の資質向上 ①研修等の充実	・授業力の向上と授業の改善をめざした校内研究会を実施する。	・全教員参加による校内授業研究会、事前研究、事後研究を実施する。	・全ての教員が年1回以上授業を公開し、研修する。 ・自主研修会「HOP」でICT活用に関する交流を行い、ICT活用力を高める。 ・全教員で情報研修会を行い、授業例を報告するなどして、ICT活用指導力の向上のために研鑽を積む。	A	・年間3回の、講師の先生を招いた授業研究を実施したり、一人一授業を行ったりして、全教員で授業力向上に向けた研鑽を積むことができた。 ・全職員で情報研修会を行い、授業例を報告するなどして、ICT活用指導力の向上の為に研鑽を積むことができた。	・授業を参観する視点を明確にし、一つ一つの授業研究が、単独にならず、繋がりのあるものになるような研究を進めていく。 ・情報研修会とHOPを行う目的の見直しをする。全職員のICT活用の指導法などを統一する。	・自主研究グループが活動していることは素晴らしい。 ・今後も教職員の資質向上のため努力に期待する。 ・授業研究等により教員のスキルUPがうかがえる。 ・全教員で研究会、研修会が実施され、情報が共有されている。
教育環境の整備・充実		学校を支える組織体制の整備 ①コミュニティ・スクールの充実 ②地域と学校の連携・協働体制の構築	・積極的に学校情報を発信する。	・授業参観等を学期に2回以上を実施する。 ・学校だよりを月2回発行し、地域にも配布する。 ・学校ホームページを週2回以上更新し、学校情報を積極的に発信する。 ・学校運営協議会委員に通常の学校生活を公開する。	・保護者アンケートで「学校の様子や目指しているものなどを分かりやすく伝えている」と回答した割合が80%以上、「学校は保護者の願いに応えている」と回答した割合が75%以上である。	A	・月2回の学校だより、週2回のホームページ更新等により学校情報を積極的に発信した。 ・人数制限のない授業参観、運動会、音楽会を実施し、各学期2回以上、保護者が来校する機会を設け、学校生活の様子を公開した。 ・学校運営協議会を平日に開催し、日常の授業の様子を委員のみなさんに参観していただいた。 ・保護者アンケートの結果、「学校の目指しているものなどを分かりやすく伝えている」約94.5%「学校は、保護者の願いに応えている」約90.8%の肯定的回答があり、目標を達成している。	・来年度も継続して、積極的に学校情報を発信し、保護者や地域に学校の取り組みを理解していただく。 ・家庭や地域と学校課題を共有し、学校・家庭・地域による教育を推進する。 ・学校運営協議会の協力を得て、地域ボランティアによる出前授業等の充実を図る。	・学校だより、授業参観等により、しっかりと情報共有されてる。 ・学校に関わる地域の人の数も多く、地域の学校としての位置づけができている。 ・学校だよりの積極的な情報発信で子どもたちの様子がわかり、花里の子を守っていこうという気持ちになる。 ・正門の掲示板に学校だよりが掲示され、地域への情報発信となっている。 ・多くの情報発信の機会が設けられ、90%を越える保護者の理解が得られていることは素晴らしい。
		安全・安心な教育環境の充実 ①学校園防犯訓練・防災教育の充実 ②子どもの安全対策の推進 ③交通安全対策の推進 ④学校園施設の整備・維持保全 ⑤学校における働き方改革の推進	・子どもたちの危機対応能力や災害の状況に応じた対応力を育てる。 ・学習環境の管理・整備を徹底する。	・登校指導（月1回）を行う。 ・防災訓練（火災1回、地震1回）を実施する。 ・防犯訓練（不審者）を実施する。 ・一斉下校訓練（学期に1回）を行う。 ・学校で学んだ防災意識を家庭に返すよう促す。 ・安全点検を行う。（月1回）	・児童アンケートで「訓練や学習を通して、災害が起きた時にどうすればいいか考えている」と回答した割合が80%以上、「家族と災害時の対応の仕方について話しあっている」と回答した割合が65%以上である。 ・保護者アンケートで「学校は学習の場として子どもが活動しやすい環境が整っている」と回答した割合が90%以上である。	B	・例年通り学期ごとに1回ずつ避難訓練を実施し、事前事後指導を入念に行ったが、児童アンケート「学校で、火事・地震・不審者に対して、訓練したり話を聞いたりしているので、それらが起きたらどうしたらいいか考えている」の結果は78.3%、「災害時にはどうしたらいいか、家族で話し合っている」の結果は44.6%だった。それに対し、保護者アンケート「学校は、災害時や不審者などの危機に対応し、行動の仕方を教えている」の結果は96%だった。 ・「学校は学習の場として子どもが活動しやすい環境が整っている」と回答した割合が95.3%となり目標を上回った。	・来年度も防災・防犯訓練の指導を充実させ、各教科の学習につなげた取り組みを行っていく。また、副読本「明日に生きる」を活用し、日常生活に取り入れられる学習を進めていく。各家庭で防災意識を高めてもらうために、子ども防災手帳の活用を呼びかけていく。 ・安全点検で見つかった施設の不具合に対しては迅速に対応していく。設備の更新や新規導入については、市教育委員会と連絡を密にして引き続き計画的に整備を進めていく。また必要に応じて、PTAとも連携しながらその整備に務めていく。	・防災や減災のための意識は、幼い時期から取り組むことが大切。大人が真剣に取り組むことで子どもたちの良い見本となる。 ・見守り活動をする中で、朝のあいさつ、帰りのあいさつができて、交通のルールを守ることへの育ちが見られる。 ・学校での安全教育を通して、家庭生活につなげ、親子で話し合い、災害が起きたときの対応を共通理解することが大切 ・災害時にどうするか、家族と話し合っている割合が上がっている。今後も地域と連携をとりながら、訓練等への参加を呼びかけたい。 ・家庭での話し合いができていない。

学校関係者評価総括

〇教育活動全般にわたり、児童の興味関心を引き出す工夫がされている。学力テスト、保護者アンケート、児童アンケート等の結果からも取組の成果がうかがえる。今後も取組を続けていただきたい。
〇保護者や地域に対して多くの情報発信の機会が設けられている。また、学校に関わるボランティアの人数も多く、地域の学校としての位置づけができている。
●読書時間については、大きな課題が見られる。中学校でも取り組んでいることであり、改善が望まれる。
●不登校支援員を中心にした取組により、不登校傾向のある児童の出席日数が増えているが、マンパワーが不足している。地域の学生等のボランティアの活用も視野に入れて取り組んでみてはどうか。

次年度に向けた重点的な改善点

・家庭、PTAと連携して、「生活ふり返り週間」を学期1回以上実施し、結果を保護者と共有することで「早寝・早起き・朝ご飯＋家庭学習」の習慣の確立を図る。
・全教職員で児童の欠席日数や欠席理由を共有し、不登校傾向の早期発見に努める。また、連続2日欠席した児童には、必ず家庭連絡を入れ、不登校の未然防止に努める。
・地域やPTAと連携して、児童が中心となって活動する機会（行事、イベント、土曜学習、委員会活動、授業等）を増やし、成功体験を重ねることで自己肯定感の高揚を図る。
・全国学力・学習状況調査、CRT調査等の結果を分析し、児童が自分の課題をメタ認知して学習に取り組めるように家庭と連携しながら、朝学習、家庭学習。個別指導の充実を図る。
・図書の授業の充実、読書ボランティアによる読み聞かせ、図書委員会による読書イベント、朝の一斉読書、家読等に取り組み、読書習慣の定着を図る。

自己評価の基準　**A**：目標を上回った　**B**：目標どおりに達成できた　**C**：目標をやや下回った　**D**：目標を大きく下回った